

## 中村不折舊藏 『勾道興撰搜神記』紙背文獻について

玄幸子

### 一、はじめに

『中村不折舊藏禹域墨書集成』所収の『勾道興撰搜神記』は早期から注目される重要文化財指定の重要な資料である。ただ、一部を除き該寫本を實見することが長らく困難であったために、『搜神記』研究の重要なテキストとしての位置づけはあるものの文獻自體に関する検討はほとんどなされてこなかったといえよう<sup>1</sup>。

ところが、ありがたいことに『中村不折舊藏禹域墨書集成』上中下三卷本<sup>2</sup>が出版されるにおよび、實寸大のカラー寫眞で比較的容易にみることが可能になった。本稿ではこの寫本の全面的な検討を念頭に置き、これまでほとんど注目されることのなかった紙背文獻を取り上げる。

まず、寫本の書誌情報は實見調査ではないので基本的には従來のものに據るしかない。

○搜神記一卷 十一紙。長一丈七尺三寸。一卷完シ。隸書。敦煌ヨリ出ヅ。首ニ搜神記一卷、句道興撰、行孝第一ト標記セリ。内容全ク傳本搜神記ト同ジカラズ。傳本ノ搜神記ハ晉ノ于寶撰トセリ。句道興撰ハ乃チ別本ナルベシ。書法異體多ク、六朝人ノ寫セルモノニ似テ、韻度高カラズ。董康氏曰ク。六朝人ノ寫セル原本ニ據リ、五代人ノ筆寫スル所ナラント。餘亦此說ニ同ス。記スル所ノ事蹟ハ、皆六朝以前ニ屬セリ。（『禹域出土墨寶書法源流考』下卷 31 葉ウラ）

<sup>1</sup>寫本を實見した上での早期の研究論文・報告には、羅振玉『敦煌零拾』中の翻刻および西野貞治『『敦煌本搜神記』について』『神田博士還曆記念書誌學論集』（平凡社、1957）437-449 頁がある。

<sup>2</sup>『臺東區立書道博物館所藏 中村不折舊藏禹域墨書集成』上・中・下、磯部彰編集、文部科學省科學研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班發行（東アジア善本叢刊第二集）、2005年3月刊。

とあり、とりわけ「五代人ノ筆寫スル所ナラント」する點は、その後の研究においても異議を唱えるものを見ない。今回出版されるに際して新たに加えられた情報は、大きさ 305 × 5371mm および購入時の詳細のみである<sup>3</sup>。

ただ、寫眞から読み取ることのできる情報によると上記の記述にいささか修正と補足の必要があるようだ。まず、「十一紙」とあるのは「十三紙」の誤りであろう。また、文字修正状況について西野 1957 で夙に指摘されているような貼紙方式以外に削り法・上書き法もみられる。さらに文字の裏寫りの状況からみて紙質が第八紙目以降に變化がみられる點などがある。これらの状況をまとめて以下に記す。

第1紙	幅 297mm	全 24 行	
第2紙	幅 422mm	全 33 行	
	08 行目「華汝」		貼紙
	13 行目「腸」	33 行目「鬻」	削り上書き
	24 行目「鹿」		上書き
第3紙	幅 425mm	全 34 行	
	22 行目「食」		削り上書き？
第4紙	幅 419mm	全 34 行	
	20 行目「守」		削り上書き？
第5紙	幅 421mm	全 34 行	
	13 行目「賜」	15 行目「會」	削り上書き
	21 行目「執」		上書き
第6紙	幅 419mm	全 34 行	
第7紙	幅 364mm	全 29 行	
	10 行目「内」	29 行目「賊」	上書き
第8紙	幅 426mm	全 33 行	
	17 行目「龍」		上書き
	32 行目「將」		貼紙
第9紙	幅 427mm	全 33 行	
	03 行目「遂」	12 行目「就」	上書き

<sup>3</sup>「許際唐舊藏であった旨が明記された領收書はないが、王樹相分の分割代金とは別に、「寫經代金」、「古寫經代」「搜神記一卷」という品目での文求堂の領收書があり、それらは王樹相分の代金を分割で支拂っていた時期、つまり大正十一年十二月二十六日から翌十二年四月二十一日と重なっている。そして、許際唐舊藏分のメモ中には「搜神記一卷」が存在する。「搜神記」は大正十二年四月二十一日に千二百圓で購入、のちに重要文化財（舊國寶）の指定をうけることになった名品である。」『中村不折舊藏禹域墨書集成』下巻所收「經卷文書類目録」360頁。

	13行目「作」	貼紙
第10紙	幅427mm 全33行	
	21行目「郡」 31行目「形」	上書き
第11紙	幅424mm 全39行	
	09行目「新婦」 17行目「若」「新」	
	39行目「家」	貼紙
	15行目「拂」 24行目「知」	
	29行目「妹」 34行目「烹」	上書き
第12紙	幅419mm 全38行	
	18行目「孝」 37行目「父」	貼紙
第13紙	幅406mm 全37行（最終行空白）	
	12行目「結」	貼紙
	13行目「症」	上書き

第8紙以降、紙質が変わっている。表裏に文字寫りがあることから、恐らく薄手の紙になったものと思われる。文字修正の状況からもこの変化を裏付けることができる。つまり、第7紙までにみられた削り修正法がみえず、貼紙法が増えている点である。紙が薄いので削ることができなかったものと思われる。第7紙の幅・行数が少ないことから、同質の紙料を缺いたため別の紙料を續けて使用したものと推察できよう。全體に罫アリ、1行の文字数は一定せず、概ね30～31字とする場合が多い。1紙の行数も第11紙以降大幅に増えている。以上が表面『勾道興撰搜神記』の詳細である。

さて、紙背であるが、残念ながら『墨書集成』では全面を1ページに収めてあるため、文字が非常に小さく時に判讀不可能な場合がある。また一部補修の薄紙が上に貼られているが、この箇所は透かして判讀できる。文字の裏寫りの状況は、表面と逆に數えて第8紙まで見られる。録文と關連資料を最後に付録とする。

## 二、紙背文獻の内容と検討

録文に即して内容を概観してみよう。まず、最初の部分18行目までについては、後に義淨により『南海寄歸内法傳』において厳しく批判されることになる絹衣禁絶説を中心に南山律師道宣の律宗を中心に構成されている。宣律師を支持する姿勢が明らかである。

『涅槃經』から南山律師道宣への流れは、諏訪1988に詳しく述べられている。「第四章 中國佛教における絹衣禁絶の思想の展開と挫折」において、まず『涅槃經』

傳來以後の絹衣に対する佛教徒の態度を明らかにしている。つまり、沈約「究境慈悲論」（『廣弘明集』卷二六）中の記述<sup>4</sup>を引き、「まことに理路整然とした論旨である。これによって中國の佛教徒の間に、一部の心あるもの間に、肅々と奉ぜられていた絹衣の禁絶が滿天下のもとに公表され、律典にも明言されていなかった絹衣の禁絶が見事に大乘慈悲の立場から理論の裏づけを得た」（98頁）と解説している。その上で、道宣の絹衣禁絶の實踐についてさらに詳細に検討し、その根拠を「大乘佛教のとく佛陀の慈悲の教えにかなうかどうか、ということ」（118頁）に求めている。

また、『佛說像法決疑經』については、木村 2001 の「III 疑偽佛典の成立と展開／『佛說像法決疑經』の思想史的性格」において、ほぼ六世紀中葉に成立した「道教の思想形成にも一定の役割を果たし」「中國的大乘の道を切り開いた」「大乘精神を鼓吹しようとした」（231-232頁）偽經であると位置付けている。

録文 19 行目以降に關しても、涅槃・維摩・華嚴・法華などの大乘經典に多く出典を求めることができる。さらに、29 行目以降では密教の三密（身口意<sup>5</sup>）に「三寶」の名および三教を對應させて解き明かしており、大乘教の下位分類の一つ密教の基本理念において儒教・道教との融合という明らかな方向が示されている。録文の記述内容を分かりやすくまとめると以下の通りである。

心	口	身
	<b>【易三寶名字】</b>	
南无佛	南无達摩	南无僧伽
佛寶	法寶	僧寶
無煩惱佛	不錯經	無煩惱僧
法佛	報佛	應佛
過去佛	現在佛	未來佛
釋迦牟尼佛	普光佛	寶集佛
卅五佛	五十三佛	二十五佛
	<b>【易三教】</b>	
如是我聞，一時佛在	道品善知識，由是成正覺	子曰學而時習之不亦悅乎
佛教	道教	儒教
過去佛教	現在佛教	未來佛教
釋迦牟尼教	李老君教	孔子教

このような對應形式は現存の一切經の中に見出すことができない。が、頼富 1997

<sup>4</sup>「それ故にここにみる涅槃經には不完全の故に絹衣の禁絶が經文に記されていないが、慈悲という佛陀の根本の教えに基づいて、その精神を徹底させて、斷食肉と共に絹衣を禁絶すべきである。」（諏訪 1988、97頁）

<sup>5</sup>本文獻では「意」でなく「心」である。

の定義によれば、密教の必要条件である三要素の1つに「神秘的合一體驗を人為的に現出するために、何らかの行法的プロセスを具備しているのが密教の第二の特徴」であり、「具體的には、我々の現存在の代表的表出である身體や、あるいは人為的に設けられた聖域區間である曼荼羅をもちいることが多い。」(206頁)ことをあげている。同一の對應關係を示す文獻がないとはいえ、かなり色濃く密教的性質を備えているといえよう。さらに土田1996で述べられる「釋迦・孔子・老子をあわせ描き、佛教・儒教・道教の合一を表わした」三教圖・三聖圖が「中國では唐から始まり、宋になって多く描かれたという」(256頁)状況からも読み取られるように、政治・社會的面で相互に拮抗しつつも三教合一への傾向がこの文獻からも明確に読み取ることができる。

42行目以降は「化生道」「胎生道」などの用語が多分に道教的であり、のちに『景德傳燈錄』へと集約されていくだろうと豫測できる「騎牛覓牛」「畫水成文」といった禪宗的表現なども見えている。ただ表現が多分に俗であり、現行の一切經ほかにその典故を求めることができない。

興味深いのは「讚～」と「毀～」と對比させる形で、「戒」「禪」「多聞」について述べているところである。このような形で書寫する意味は何だろうか、大いに考えさせられる。が、この問題はひとまず置き、『大方廣十輪經』について説明を加えるなら、「北涼失譯八卷本」のこの佛典は、「他の地藏諸經に見るが如く地藏信仰の鼓吹である。而して本經が著しく調和的傾向を有せるは注意すべきである。即ち、釋迦・彌勒二佛の中間にあつて調和し、佛法と王法との調和接近、佛弟子は大乗に驕傲であり、二乗を卑下することなく、三乗兼習にして而も大乘(般若の無相皆空)に旨歸すべしとなし、僧は持戒堅固なるべく、俗人は三寶に對し絶對的の信仰を持すべく、兩者を戒飾し、接近せしめたるが如き」<sup>6</sup>と解説される。この特徴は、録文のすぐ後にみられる「俗人受持」「行者受持」や「大乘得性樂」「小乘失性苦」「中乘不異經」において確認できる相互接近に通じる点がある。

以上をまとめると、この文獻の内容は、

1. 律宗の立場に立つ
2. 道教・儒教と融合
3. 禪宗と融合
4. 後半は表現が自由で俗な部分も見受けられる

という性格を持つことが確認できる。これは、ちょうど律宗が一たん衰退し、宋代に再度復興するのに向けて力を貯めている五代の佛教の在り方を大いに傳えて

<sup>6</sup>『佛書解説大辭典』第7巻、462頁左。

いると考えられる。

### 三、『勾道興撰搜神記』との関わり

敦煌寫本には表と裏（紙背）が全く関連性のないものが数多く存在する。が、逆に深い関連のあるものが一部存在するのも事実である。今回の文獻については、深い関連性を持つと考えている。

そもそも『搜神記』とは何か、という点から再度考察を始める必要がある。『〇〇搜神記』という表記はざっと検索をかけただけで、数種類<sup>7</sup>は見つけることができる。本来、複数種の『搜神記』があるのは不思議ではない。この点を確認した上で、『勾道興撰搜神記』はいつどのような人物が書寫したのかを考察する必要がある。

『道宣律師感通錄』（麟徳元年終南山釋道宣撰）「宣律師感天侍傳」の中で道宣は「余曾見晉太常干寶撰搜神錄述」と記述している。六朝志怪から唐代傳奇へと続く流れがどのような書き手と讀者に支えられたのかを考えると、當然佛教との係わりが大きな比重を占めるのは周知のことであるが、その中で残らずに消えていった多くの異本が存在したであろうことは想像に難くない。よって書名も多くの異名を持つこととなる。ここでいう『搜神錄』は現在の固定した名稱『搜神記』と置き換えて問題なかろう。

さらに、藤吉 2002 では「晩年の道宣が永徽四年に撰せられた『冥報記』を、参考文獻としてフルに利用し」「『感通錄』の編纂が物語るように、もともと感通に関心を拂い、『續高僧傳』に感通の一編を新設したほどの道宣が歳を重ねるにつれ感通へ傾斜していった」ことを指摘し、道宣の試みを「歴史と感通の調和」（318

<sup>7</sup>①『太平御覽』卷八三六

干寶搜神記曰：南方有蟲、其形若蟬而大、其子著草葉如蠶種。得子以歸、則母飛來就之。殺其母以塗錢、以其子塗貫、用錢貨市、旋則自還。故『淮南子・術』以之還錢、名曰青蚘。

②『北史』卷九十三、列傳第八十一「僭偽附庸」

（蒙遜）後又稱蕃于宋、竝求書、宋文帝竝給之。蒙遜又就宋司徒王弘求搜神記、弘與之。

③『史通』卷第十七外篇、雜說中第八「諸晉史」

馬遷持論、稱堯世無許由、應劭著錄云、漢代無王喬、其言讜矣。至士安撰高士傳、具說箕山之跡、令昇作搜神記、深信葉縣之靈。

④『初學記』卷二十九獸部、狗第十「烏龍青鶴」

陶潛搜神記曰：會稽句章人張然養一狗甚快名曰烏龍。

⑤『太平廣記』卷四百四十三、畜獸十「車甲」

陶潛搜神記曰：有一士人姓車、是淮南人。天雨、舍中獨坐。忽有二年少女來就之、着紫纈襦立其牀前、共語笑。車疑之、天雨如此女人從外來、而衣服何不霑濕、必是異物。其壁上先掛一銅鏡徑數寸、回顧鏡中有二鹿在牀前。因將刀斫之而悉成鹿。一走去、獲一枚以爲脯食之。出五行記。

頁)と表現する。その出自をも自ら僧祐の生まれ変わりとする道宣の靈驗・感通への傾倒は廣く知られるところである。該書では出自から遊方について詳細な検討がなされているが、とりわけ入蜀時に『後集續高僧傳』の資料蒐集を自らの聞き書きで行ったと検証する第8章は興味深い。蜀は中國古來より靈驗あらたかな地域として捉えられており、事實『後集續高僧傳』の内容が習禪・感通兩篇に偏っているのは道宣が地域的な特徴の影響を受けたものと考えられる。

かような道宣の感通への傾倒を考慮するならば、『搜神記』紙背に南山律師道宣の律學を中心とする佛教論が書寫されているのは偶然ではないと考えられる、少なくとも、律宗系列の僧が正面の『勾道興撰搜神記』を書寫したと推察できよう。書寫時期もほぼ同時期ではなかっただろうか。

また、「勾道興撰」については、この人物を特定することは困難であるとは思われるが、ひとつの可能性として益州福勝寺道興との關連を探ってみたい。藤吉2002で『續高僧傳』興聖寺本と、宮本・三本系統にみえる寶淵付傳の道興なる人物が『後集續高僧傳』所收の「益州福勝寺道興」に相違なかろう(285頁)とする人物である。今後の課題としたい。

#### 四、まとめ

寫本を全體としてとらえ総合的に検討することで従來と異なる視點で捉えなおす可能性がでてくるはずだという自身の見解に基づき、手始めとして紙背文獻を検討した。結果、文獻自體は五代から宋代へ向かう佛教の過渡期の様相を示す意味のある資料であると確認はできたものの、肝心の正面の『搜神記』との關係をしっかりと證明するにはまだ材料不足で満足のいく結論が出せないままである。もう少し傍證となる材料を補足する必要があるだろう。

##### 【使用テキスト】

『臺東區立書道博物館所藏 中村不折舊藏禹域墨書集成』卷中、磯部彰編集、文部科學省科學研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉總括班發行(東アジア善本叢刊第二集)2005年3月

##### 【對照文獻】

『大正新脩大藏經』第1-85冊、東京：大正一切經刊行會、1925年

『卍續藏經』第1-150冊、臺北：新文豐出版公司、1983年



『道藏』第 1-36 冊、北京：文物出版社、1988 年

CBETA Chinese Electronic Tripitaka Collection

『景德傳燈錄』常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏宋刻本（四部叢刊三編）

『會稽掇英總集』二十卷、『景印文淵閣四庫全書』第 1345 冊所收本、臺灣：商務印書館

「廬山遠公話」P.2073

【參考・引用文獻】

木村 2001 木村清孝『東アジア佛教思想の基礎構造』東京：春秋社、2001 年

諏訪 1988 諏訪義純『中國中世佛教史研究』（學術叢書・禪佛教）、東京：大東出版社、1988 年

土田 1996 土田健次郎「特論 三教圖への道——中國近世における心の思想」『東アジア社會と佛教文化』（東京：春秋社「シリーズ・東アジア佛教」第 5 卷）所收、1996 年

西野 1957 西野貞治「『敦煌本搜神記』について」『神田博士還曆記念書誌學論集』東京：平凡社、1957 年、437-449 頁

藤吉 2002 藤吉眞澄『道宣傳の研究』（東洋史研究叢刊 60）、京都大學學術出版會、2002 年

頼富 1997 頼富本宏「密教系の佛教」『佛教の東漸 東アジアの佛教思想 I』（東京：春秋社「シリーズ・東アジア佛教」第 2 卷）所收、1997 年



## 付録

〔録文〕 中村不折舊藏（書道博物館現藏）寫本 No.139V<sup>8</sup>

※大正藏・續藏經ほか関連資料がある場合は注に所在を示し、同文箇所は相互に太字で表示した。文字が讀めない場合は□で、異同があり改めるべき文字は（ ）内に示した。

身得男子身，須跋陀羅，得阿羅漢果<sup>9</sup>。荼毗卷<sup>10</sup>下說即礼舍利悲戀而還<sup>11</sup>。像法決疑經說<sup>12</sup>：比丘及沙弥僧損三寶一豪一粟，永沉苦海，賢劫千佛出盡無懺悔處，若共此人同住，日夜得罪，所作法事羯磨布薩悉不成就。宣律師断輕重儀<sup>13</sup>：蠶繭所出絲綿。計本深當性制。故是綿臥具三衣。律断斬判又橋奢耶繪綵涅槃正制不服。央掘許其轉來。且接小機。後云。不成悲者非大乘行，故五分云。有將綿來施者受以入僧。即非自己。五分云。若得已成者斬判和泥。判非所服。由本損生害命而獲。何成慈悲法服也。正是懷道者所忌。无當譏過者初無。今一方禪侶並不服之。皆以布艾為衣裳。可謂學大乘行之階漸也。余親問西來遊僧。五竺諸蕃無著蠶絹為三衣者<sup>14</sup>。故楞伽中寺內煙起者。如實行人不應食也<sup>15</sup>。律抄第八<sup>16</sup>。乞蠶綿作袈裟戒十一<sup>17</sup>。多論四意。一止誹謗故。二長信敬故。三為行道得安樂故。

<sup>8</sup> 目錄に「[E] 聖典及び子類 <9> 搜神記一卷」とあるもの。

<sup>9</sup> 『大般涅槃經』卷第四十「人女天女二萬億人現轉女身得男子身。須跋陀羅得阿羅漢果。」（大正藏第12冊、0852b2-0852b3）

<sup>10</sup> 『大般涅槃經』機感荼毘品第三には該當個所見えず。

<sup>11</sup> 『大般涅槃經後分』卷下「佛已先說分布法軌。舍利皆已各有所請。無有仁分。仁可還宮。王及臣眾不果所請。愁憂不樂。即禮舍利悲戀而還。爾時諸菩薩及聲聞眾。天人龍鬼國王長者大臣人民。一切大眾悲號涕泣搥胸大哭。五體投地作禮而去。」（大正藏第12冊、0912a9-0912a14）

<sup>12</sup> 『佛說像法決疑經』「是諸比丘沙彌。乃至千佛出世永不聞法。常在三途無懺悔處。若共此人同住居止。羯磨布薩所作法事悉不成就。皆當得罪。善男子。若有具犯四重五逆。易救可懺悔。若侵損眾僧一毫一粟。非時食噉。自在取與。永沈苦海終無出時。或現世得諸衰惱。若共此人同住居止。日夜得罪。」（大正藏第85冊、1337c21-1337c27）

<sup>13</sup> 『量處輕重儀』末卷（唐貞觀十一年神州遺僧釋迦道宣緝敘）大正藏第45冊、No.1895

<sup>14</sup> 『量處輕重儀』末卷、大正藏第45冊、0852c11-0852c21

<sup>15</sup> 『量處輕重儀』末卷、大正藏第45冊、0850b15-0850b16

<sup>16</sup> 『四分律刪繁補闕行事鈔』（京兆崇義寺沙門釋道宣撰述）受戒緣集篇第八、大正藏第40冊、No.1804。

<sup>17</sup> 『新刪定四分僧戒本』（終南山沙門釋道宣撰）三十尼薩者波逸提法、乞蠶綿作袈裟戒第十一。

四不害眾生生命故<sup>18</sup>。不破戒。涅槃中。皮革履屣僑奢耶衣。如是衣服悉皆不畜。是正經律。今有一方禪眾。皆著艾布者豈不順教<sup>19</sup>。維摩經：雖為白衣，奉持沙門清淨律行；雖處居家，不著三界；示有妻子，常修梵行；現有眷屬，常樂遠離；雖服寶飾，而已（以）相好嚴身；雖服（復）飲食，而已（以）禪悅為味；若至博奕戲處，輒以度人；受諸異道，不毀正信；雖明世典，常樂佛法；一切見敬，為供養中最<sup>20</sup>。已上九十一字明身。維摩經八法 饒益眾生而不望報；代一切眾生受諸苦惱，所作功德盡以施之；等心眾生，謙下無礙；於諸菩薩示（視）之如佛；所未聞經，聞之不疑；不與聲聞而相違背；不嫉（嫉）彼供，不高己利，而於其中調伏其心；常省己過，不誦彼短<sup>21</sup>。已上八十一字明行。法蓮華經 不輕菩薩 深敬汝等，不敢輕慢。汝等皆行菩薩道，當得作佛<sup>22</sup>。已上九十一字明心。易三寶名字<sup>23</sup>：南无佛隨是心，心是佛寶，亦名無煩惱佛，亦名法佛，亦名過去佛，亦名釋迦牟尼佛，亦名卅五佛。既自心是佛寶，一切眾生皆有佛心，有心者即是佛寶。如上所易名字，一一具足，無虧一點云尔。南无達摩是口，口是法寶，亦名不誦經，亦名報佛，亦名現在佛，亦名普光佛，亦名五十三佛。即自口是法寶，一切眾生皆有口，有口者即是法寶。如是所易名字，一一具足，不少一毫 南无僧伽是身，身是僧寶，亦名無煩惱僧，亦名應佛，亦名未來佛，亦名寶集佛，亦名二十五佛。既自身是僧寶。一切眾生皆有身。有身者即是僧寶。如上所易名字一一具足不少一分。易三教，如是我聞一時，佛在是心心是佛教亦名過去佛教，亦名釋迦

<sup>18</sup> 『四分律刪繁補闕行事鈔』卷中、大正藏第 40 册、0068c25-0068c27

<sup>19</sup> 『四分律刪繁補闕行事鈔』卷中、大正藏第 40 册、0069a11-0069a13

<sup>20</sup> 『維摩詰所說經』方便品第二、大正藏第 14 册、0539a19-0539a25

<sup>21</sup> 『維摩詰所說經』香積佛品第十「維摩詰言：菩薩成就八法，於此世界行無癩瘡，生于淨土。何等為八？饒益眾生，而不望報；代一切眾生受諸苦惱，所作功德盡以施之；等心眾生，謙下無礙；於諸菩薩視之如佛；所未聞經，聞之不疑；不與聲聞而相違背；不嫉彼供，不高己利，而於其中調伏其心；常省己過，不誦彼短，恒以一心求諸功德，是為八法。」（大正藏第 14 册、0553a29-0553b8）

<sup>22</sup> 『妙法蓮華經』常不輕菩薩品第二十「……而作是言：我深敬汝等，不敢輕慢。所以者何？汝等皆行菩薩道，當得作佛。」（大正藏第 9 册、0050c19-0050c20）

<sup>23</sup> 『搜玄錄解四分律刪繁補闕行事鈔錄』卷第一（吳郡雙林寺沙門釋 志鴻撰述）「依戒疏云：一理體者，如五分法身為佛寶，滅理無為是法寶，聲聞學無學功德是僧寶，二化相者，如釋迦道王三千為佛寶，演布諦教為法寶，物隣等五為僧寶，三住持者，形像塔廟為佛寶，紙素所傳為法寶，戒法儀相為僧寶。」（續藏經第 95 册 0295 頁〔148 葉表〕上段 5-9）；『四分律含注戒本疏行宗記』一上之二、續藏經第 62 册 0365 頁〔183 葉表〕上段 2-17

牟尼教 **道品善知識**，由是**成正覺**<sup>24</sup> 是口口 是道教 亦名現在佛教，亦名李老君教 子曰學而時習之不亦悅乎 是身身 是儒教 亦名未來佛教，亦名孔子教<sup>25</sup>。五道，**天道 人道 地獄道 畜生道 餓鬼道**<sup>26</sup>。天道，剃頭出家，心不明了，口誦耳聞，久於佛道，多聞智惠，善巧方便，讀誦通利。見佛見閻羅王，並是**化生道**<sup>27</sup>。雖是小果報盡受生，作蠶作牛，償他衣食，是故名為不了義教，名為化生道。人道，雖是俗人姪欲之法，十日一度，洗浴清淨，別室安置，小心怕怖，行同君子。從人至人，從佛至佛，故名常住三寶，名為**胎生道**<sup>28</sup>。地獄道，修造宅舍，婚姻迎嫁，烹宰煞害，飲酒噉肉，夫妻相配，眷屬聚集，大膽作惡行，無著恥業，不見閻羅王，亦不聞佛名，隨業受報遞相食噉，直墮畜生。莫知劫數，是故名為水沉苦海，無有出期，名為地獄道。畜生道，何名畜生，姪欲熾盛，不擇禽獸，貪嗔嫉妒，無有厭足，不存人行，死墮畜生，着轡負鞍，戴角負毛，耕犁種植，鞭脊打背，晝夜辛苦，筋皮力盡，膝行肘步，以死為期，償他宿債，無告訴處，死竟更生，於此死已，轉轉受苦，不招餘報，遞相食噉，未有出期名為畜生道。餓鬼道，不持齋戒，飽食無慙，受人信施，無慙無愧，專作惡業，所至之處，赤形露體，五百生中，不聞漿水，飲食之名，所至江河，變為流火，是故名為餓鬼受報，名為餓鬼道 如來有十号<sup>29</sup>

如來者 放同先 跡号 應供者 堪為福 田号 正遍知者 窮盡法 界号 明行足者 因由緣 成号  
 善逝者 果從因 得号 世間解者 施偽辨 真号 無上士者 勝處無 過号 調御丈夫者 眼生從 道号

<sup>24</sup> 『維摩詰所說經』佛道品第八、大正藏第 14 册、0549b29-0549c6。

<sup>25</sup> 『成唯識論疏抄』卷第一（北京靈泰法師撰）、續藏經第 80 册、0201 頁〔101 葉表〕下段 12。

<sup>26</sup> 『菩薩從兜術天降神母胎說廣普經』卷第一、菩薩處胎經聖諦品第三「天道人道餓鬼道畜生道地獄道。」（大正藏第 12 册、1020c17）

<sup>27</sup> 『靈寶无量度人上品妙經』（〔宋〕佚名撰）卷十二、陰陽化生品「道言，凡誦是經十過，諸天齊到，億曾萬祖，幽魂苦爽，皆即受度。上昇朱宮格。皆九年受化，更生得為貴人。而好學至經功滿德就皆得神仙，飛昇金闕，遊宴玉京也。上學之士，修誦是經，皆即受度飛昇南宮，世人受誦，則陰陽順化**化生道**入身延壽長平後，皆得作屍解之道，神魂暫滅，不經地獄，即得返形。」（『道藏』第 1 册、1-78、c12-c18）

<sup>28</sup> 『靈寶无量度人上品妙經』卷四十三保胎護命品「今日校錄諸天臨軒：東方无極**保胎生道**神王長生大聖无量度人。」（『道藏』第 1 册、1-289、b3-4）

<sup>29</sup> 『南本大般涅槃經會疏』（北京天竺三藏曇無讖譯）卷第十六「釋十號是釋名下義。釋眾德是釋體下義。先列十號章門。善男子云：何念佛。如來，應（供），正徧知，明行足，善逝，世間解，無上士，調御丈夫，天人師，佛世尊。」（續藏經第 57 册、0202 頁〔101 葉裏〕上段 16-下段 1）

天人師者應機受法号 佛世尊者覺悟成30道号 維摩經十大弟子品<sup>31</sup>

第一舍利弗智慧小利第一是 第二目健連神通手第一是 第三大迦葉頭陀大利第一是

第四須菩提解空足第一是 第五富樓那說法口第一是 第六迦旃延解義鼻第一是

第七阿那律天眼眼第一是 第八憂波離持律身第一是 第九羅睺羅密過心第一是

第十阿難多聞耳第一是

住在娑婆界，無伴一身憂，設有多方便，縱橫難出頭，努力勤精進，西方莫遠求，打破煩惱陣，三界獨遨遊，無始巡三界，打罵不生瞋<sup>32</sup>，內心常寂靜<sup>33</sup>，外相示同塵，假說空中語，終成會裏真，六道難分別，人是釋迦身，病苦求師懺，不識釋迦因，真心空裏覓，魔佛共相親，經中說野語，多悟後頭人，動即塵沙劫，果成羅漢身。

尋經討論不怕，恒在名相中忙，未達真如實理，三世徒自滅亡，忽逢釋迦慈氏，果報不羨定光，如來共同一界，日日罵辱解槍。

高心我慢學道，地獄受罪時長。

安安緩緩莫忙，神通變化無方，名相人天中覓，三塗地獄隱藏。

來來去去不定，對面誰共平章，積劫累年難見，徒費飲食衣

糧，不用善知識語<sup>34</sup>，羅漢果極還償，智者慚心端坐，即是淨土道場。

愚癡多積聚，智惠著身財，欲求□□道，純莫共相非，

小心慎三業，不畏被人欺，證得菩提果，永劫度三灾。

<sup>30</sup>『翻譯名義集』一、十種通號第一「故今此集先列十號。言十號者，一做同先跡號，二堪為福田號，三遍知法界號，四果顯因德號，五妙往菩提號，六達偽通真號，七攝化從道號，八應機授法號，九覺悟歸真號，十三界獨尊號。」（大正藏第 54 册、1056c11-1056c15）；『四分律鈔簡正記』（後唐景霄纂）卷第十六、第八道俗篇「十號者，一如來做同先跡號。二應供堪為福田號。三遍遍知達偽知真號。四明行足因果圓滿號。五善逝妙往菩提號。六世間解窮盡法原號。七無上士調御丈夫降生成道號。八天人師應根說法號。九佛覺悟圓明號。十世尊世出世間號（解此一號。如經論中今此因便。不勞繁述）。」（續藏經第 68 册、1002 頁〔501 葉裏〕下段 16-1003 頁〔502 葉表〕上段 3）

<sup>31</sup>現行的『維摩經』には「十大弟子品」は見えず。該當箇所は以下に見える。

『律宗新學名句』（宋紹聖元 A.D.1094）卷下「佛十大弟子：一舍利弗翻身子智慧第一，二目健連翻採菽神通第一，三迦葉翻飲光頭陀第一，四須菩提翻空生無諍第一，五富樓那翻滿慈子說法第一，六迦旃延翻扇繩論義第一，七阿那律翻無貧天眼第一，八優波離翻近執持戒第一，九羅睺羅翻障蔽密行第一，十阿難翻慶喜多聞第一。」（續藏經第 105 册、0658 頁〔329 葉表〕上段 14-下段 1）

<sup>32</sup>『大乘義章』卷第十一、四聖種義兩門分別「第一辨相。四聖種者亦名四依。乞食等法能生聖道。…（中略）…十一離瞋惱乞。如地持說。若得麤澁留難不時。或加打罵不生瞋惱。方於破所起憐愍心。（大正藏第 44 册、0680b9-0680c9）

<sup>33</sup>『維摩羅詰經文疏』卷第十七「若如此諸亂想皆不可得，則息心達本原，內心常寂靜也。」（續藏經第 28 册 0167 頁〔84 葉裏〕上段 6-7）

<sup>34</sup>『淨土論』卷下。第九教人欣厭勸進其心「問曰。今既是第四五百年。眾生無定慧分。唯懺悔念佛。得堅固者。云何教人欣厭。勸進其心。普令一切眾生悉厭惡娑婆。得往生淨土。答曰。今引經論及道理。…（中略）…都由我無始已來。不敬三寶。不近善人。不用善知識語。常在三惡道中。恒與諸佛。不相遇。十方淨土無苦無惱。我何為不生。常在此穢土多苦惱處。我今此身難得易失。」（大正藏第 47 册、0101a22-0101b18）

傍家喫鹿飧，日日遶門巷，鉢盂成（盛）飯滿，一處覓俎醬，  
結跏盡飽飧，無病唱王相，塚間樹下坐，不須求師匠，  
貧富及親疏，普皆無怨傷，六道諸眾生<sup>35</sup>，悉是如來藏<sup>36</sup>，  
巡門乞鹿飧，弃生純取熟，鉢盂雜盛滿，一處受羹粥，  
塚間樹下坐，人人各別宿，不須求釋迦，菩提道臻湊，  
日食千家飯，功成果不謬，小心普敬徹，不被刀兵戮。  
以果收因<sup>37</sup>皆是佛，即飲醍醐一味漿，信知含靈有佛性，  
即見如來滿十方。  
莽莽如來藏，心心念念常莫忘<sup>38</sup>，除身敬作佛，恒將三業常供養。  
如來藏，佛性香，家家有，熟形相，離此法，更無方，錯去也<sup>39</sup>。  
自身當，三塗即日至，積劫苦心王，名相弟，莫放忙，無名兄忽至，  
条你碎如糠<sup>40</sup>。  
訛墮遊三界，放鈍造顛狂，終日悠悠過，爛致釋迦腸。  
有為諸法苦，眾聚心難一，吾今由是故，持鉢波栖乞。  
鹿餐一鉢得安存 佛境空村至容豫 隱去來 誰知我家處<sup>41</sup>。  
咨咨夏夏焦焦，三毒火起自燒，惡業窮鬼得迎，  
不得一日滔滔，男夫与他傭力，女婦容春紡線，  
資祖王役不辦，鞭脊打背飢號，今身見是地獄，  
何況死後重遭，啟勤通相告示，由自努嘴袍遭，

<sup>35</sup>『慈悲道場懺法』卷第六、解怨結之餘「今日道場同業大眾，相與已得懺身口罪竟。次復應須清淨意業。…（中略）…我等無始已來至于今日，已有無量無邊瞋惡恚心。乃至起瞋不避親族。何況六道諸眾生等。及其煩惱猛毒不復自知。（大正藏第 45 册、0948a28-0948c3）」

<sup>36</sup>『大乘止觀法門』卷第四、南嶽思大禪師曲授心要「觀察自身心，知悉由染業，熏藏心故起，既知如來藏，依熏作法，應解眾生體，悉是如來藏，復念真藏心，隨熏作法，若以淨業熏，藏必作佛果，譬如見金蛇。」（大正藏第 46 册、0662a21-0662a26）」

<sup>37</sup>『大毗盧遮那成佛神變加持經義釋演密鈔』卷第九「【疏】疑此點一一等者，指上輪心想九點也。乃於華臺及八葉中，各安一點，即表大空成正覺義，謂以果收因。四隅菩薩俱置空點。故令更問也。若欲置字者，中臺四方即是阿阿暗惡嚙。四隅普賢三字，文殊瞞字，觀音娑字，慈氏昧字也。（續藏經第 37 册、0230 頁〔115 葉裏〕上段 13-17）」

<sup>38</sup>『銷釋金剛科儀會要註解』卷第七、福智無比分第二四「每於晨朝念百八遍。若至十萬遍，見十方一切如來。二十萬遍，見一切佛土。一百萬遍，見一切佛。灌頂成就菩提此乃教中。所說之義也。我憶彌陀如父母，彌陀觀我似嬰孩，心心念念常無間，父子相隨歸去來。」（續藏經第 92 册、0389 頁〔195 葉表〕下段 13-18）」

<sup>39</sup>動詞の前の“錯”の用法については、佛典では宋代以降の用例しか見いだせない。

<sup>40</sup>『雜阿含經』卷第五十「尊者大目犍連語尊者舍利弗言：奇哉！尊者舍利弗。真為大德大力。此鬼若以手打耆闍崛山者，能令碎如糠糟。況復打人而不苦痛。」（大正藏第 2 册、0367b18-0367b22）」

<sup>41</sup>『釋禪波羅蜜次第法門』卷第二、分別禪波羅蜜前方便第六之一「行人若能通達，如前所辯五種。明諸禪相，則內信開發。若欲安心習學，必須善知方便。今明修禪方便，大開為二。…（中略）…佛問其無常等義，事事能答。後佛問：汝家在哪處？答佛言：三界皆空，世尊，云何乃問我家處？佛語阿難。」（大正藏第 46 册、0483c26-0484a25）」



死墮畜生之內，不免努咽受刀。

聞歌眼自精朋（明），聽法闇如昏睡，飲酒不惜錢財，  
逢齋寧肯布施，雞雉活捉生燻，豬羊仰鯁橫刺，  
不念持齋行道，唯憶煞生口味，死墮地獄之中，  
閻羅勘其名字，隨緣受苦，不可稱記，或碓禱摩，  
斬頤截鼻，杖舌犁耕，寒冰涌沸，如此惡業，自作自受，  
無山無海，何處逃走，聞勢努力，莫作貧各（客）。  
敬心三業皆須盡，聞他打罵轉加真，當即頃翻無始業，  
三祇豈更戀斯身，  
真如佛性清淨心，體非真妄能淺深，若欲敬時眾生是，  
何須彼此逐浮沉。

本業住宅在西方，無事逃亡作羈客，千金萬寶不能用，  
無事飢凍受危厄，父母慈悲屬信喚，終日叛心常拒逆，  
恒日怨天常各地，不肯翻心自訶（苛）責，所以名相不得通，  
顛倒有心名相隔。四無量心，

慈無生不度，悲齊苦無辭，善違順等受，捨財命俱盡。

**觀像六益：一破戒者護，二失道者道，三盲寔者目，四犯罪者藥，五黑闇者燈，六愚癡者慧**<sup>42</sup>。行道六益：一破懈怠，

二除睡眠，三消宿食，四堪遠行，五神通因，六得道疾。

多人說陰空，不知陰無我，若聞（問）陰有無，頻（鑿）蹙瞋言對，  
若知陰無我，聞罵心不憂（瞋），有或繼（繫）屬魔，悟空無忿怒<sup>43</sup>，  
得打何須忿，被罵不勞嗔，但能返自責，純莫很前人，  
境妄由心妄，心真境亦境，除身敬作佛，誰上起貪瞋，  
敬他佛性善，自見身中惡，欲求闡提人。此是當根藥，  
身是如來藏，眾生是佛苗，迷時將作遠，悟即是非遙。  
多口淫慮廣，念鬧廢心澄，不如息妄想，便與理相應，  
修習唯求一，悟達不須多，信依無我行，除佛更無過，  
夏袖唯須短，春衣不用長，寧將布裏玉，不用錦纏糠，  
子 王

<sup>42</sup>『佛說觀佛三昧海經』卷第九、本行品第八「佛告阿難。此觀佛三昧。是一切眾生犯罪者藥。破戒者護。失道者導。盲冥者眼。愚癡者慧。黑闇者燈。煩惱賊中是勇健將。諸佛世尊之所遊戲。首楞嚴等諸大三昧始出生處。佛告阿難。汝今善持慎勿忘失。過去未來三世諸佛。是諸世尊皆說如是念佛三昧。我與賢劫諸大菩薩。因是念佛三昧力故。得一切智威神自在。如是十方無量諸佛。皆由此法成三菩提。（大正藏第15冊、0689c5-0689c13）

<sup>43</sup>『月燈三昧經』卷第二（高齊天竺三藏那連提耶舍譯）大正藏15冊、0557b18-0558b21

納衣長乞食，動止心常一<sup>44</sup>，諦視正思惟，但觀諸法寶，樂道不擇餐，食麤心猛利，細食恣情欲，十惡煩惱熾，執鉢隨其境，日午聽鍾鳴，日食千家飯，衣服不須榮，食罷尋長路，逍遙万里行，超越閻浮境，出世度眾生，眾生癡兀兀，恒在無明窟，身中有寶珠，不解勤摩耕，漂流生死河，出頭還復沒。

不輕因何禮四眾，知是當來真佛朴，尋念過去出纏人，悉敬眾生成正覺。

不輕現得六根淨，為敬眾生真佛性，受打受煞竟無瞋，為此捨凡成大聖。

**慢為眾苦本，諸導師所說，有慢苦憎（增）長，離之則苦滅<sup>45</sup>。**

大般涅槃經破膽傷心品第一

狐狸共來去，鬼氣滿身中，夢裏交遊密，被氈恒共同，鬼精入腹內，詐作世間胎，願得男子身，永劫除怨結。

勝鬘經無性授記品第一

惱他活佛，身自受殃，少得療除，舊病還發，長年受苦，歷劫難當，樓至第千，永為授記，修道之人，莫護名相，鬧樂世界，恒持三杖，內裏燈清，外須壯浪，智惠利劍<sup>46</sup>，斫斷名相，無名修善，闇裏作帳，隨世所修，並悉虛妄，**真修道者<sup>47</sup>**，莫嫌違妨，迴穢作淨，即是無量，西方即至，**不須師匠<sup>48</sup>**，逍遙獨遊，**出離三障<sup>49</sup>**……………。

<sup>44</sup> 『大智度論』釋初中讚尸羅波羅蜜義第二十三「復次，居家憤鬧多事多務，結使之根，眾惡之府，是為甚難。若出家者，譬如有人，出在空野無人之處而一其心，無思，無慮，內想既除，外事亦去。如偈說：「閑坐林樹間，寂然滅眾惡；恬澹得一心，斯樂非天樂。人求富貴利，名衣好床褥；斯樂非安隱，求利無厭足。納衣行乞食，動止心常一；自以智慧眼，觀知諸法寶。種種法門中，皆以等觀入；解慧心寂然，三界無能及！」（大正藏第 25 冊、0161a6-0161a17）

<sup>45</sup> 『月燈三昧經』卷第二「童子。汝當觀此三昧有是威力。能令菩薩招致阿耨多羅三藐三菩提。童子。菩薩摩訶薩當安住深忍法中。…（中略）…爾時世尊。說偈頌曰。…（中略）…多聞與持戒，二俱不自恃，恃慢薄福人，由是起眾苦，慢為眾苦本，諸導師所說，有慢苦增長，離之則苦滅。」（大正藏第 15 冊、0557a28-0558b6）

<sup>46</sup> 『大乘本生心地觀經』卷第二、報恩品第二之上「爾時五百長者白佛言：世尊，如佛所說，一佛寶中無量化佛，充滿世界利樂眾生，以何因緣？世間眾生多不見佛，受諸苦惱。…（中略）…法寶猶如智慧利劍，割斷生死，離繫縛故。」（大正藏第 3 冊、0299b11-0299c19）

<sup>47</sup> 『金光明經文句記』卷第四「今言十行初住者。恐誤也。或別有意。**真修道者**。即通八地。」（大正藏第 39 冊、0137a23-0137a24）

<sup>48</sup> 『出曜經』卷第二十三、泥洹品第二十七「應化之人或憑所豪。或因有所濟。應豪貴度者。不加言聲。所憑度者。豁然自寤**不須師匠**。謙恭卑下者自然得寤。是故說曰光焰所不照亦不見其實也。」（大正藏第 4 冊、0735a19-0735a22）

<sup>49</sup> 『攝大乘論釋』卷第十四「若大乘中修十地行，**出離三障**。」（大正藏第 31 冊、0257a2）



年高髮毛白，焦瘦骨參差，氣力虛羸弱，恒將坐臥疲，  
耽貪生死業，純憎愛婦兒，地獄長時苦 唯佛一人知。  
歸去來，莫懷愁。久染生死由名相，無名至理極閑優，  
欲學小心中作佛，喻若騎牛人覓牛<sup>50</sup>。

歸去來，急須走。世間眾事斷攀緣，閉戶塞牕須禁口。  
臨時斟酌，勿使有傷，深自思惟，有疑數問，日出慶東方，  
真佛違中藏，打罵能忍受，身如斷石光，斷石看光光即滅。  
過牕射箭箭不停，畫水成文<sup>51</sup>，文即滅，鏤冰作器器難成。  
逍遙三界外，示受入娑婆，應來傳聖教，接引離耶魔。  
積劫遊三界，不願作人王，真金弊布裏<sup>52</sup>，不用錦成糠<sup>53</sup>。  
生居淨土位，破落屬神皇，親眷分離散，何時還故鄉。  
身雖學禪觀，心中不解忙，枉經積年苦，歷劫受無常。  
未悟真如理<sup>54</sup>，長辭佛性堂，努力勤精進，端坐至西方。

#### 讚戒

持戒即為樂，不畏受眾苦，睡眠得安穩，悟即心歡喜。

#### 毀戒

勿自是持戒，輕彼破戒者，持戒陵於人，是名真破戒<sup>55</sup>。

#### 讚禪

禪能滅諸結，餘業則不能，是故禪第一，智者應供養<sup>56</sup>。

<sup>50</sup> 『景德傳燈錄』福州大安禪師「何者即是。百丈曰：大似騎牛覓牛。」(卷第九、9表10-11)

<sup>51</sup> 『景德傳燈錄』江西大寂道一禪師「猶如畫水成文不生不滅。是大寂滅。在纏名如來藏。出纏名大法身。法身無窮體無增減。能大能小能方能圓。應物現形如水中月。」(卷第二十八、7表11-13)

<sup>52</sup> 『圓覺經略疏之鈔』卷一「故云，徧禮一切，身內佛者，如塵中大千經卷，如弊布裏真金，如蕉模中佛像，如器中之鐺音等。」(續藏經第15冊、0436頁〔218葉裏〕上段13-14)

<sup>53</sup> 『廬山遠公話』(S.2073)「不見道，孔丘雖聖著久迷對曰之言；大覺世尊，上(尚)有金槍之難。維摩居士，由(猶)遭光嚴童子唱責。忍辱仙人，被歌利王割截身體。君子不欺闇室，蓋俗事(士)之常談，賤奴擬問經文，座主忘空便額。只如峻山，却生毒藥；淤渥之中，乃生蓮華。彼布袋裏有明珠，錦袋裏成(盛)糠何用？」

<sup>54</sup> 『會稽掇英總集』(〔宋〕孔延之編)題天章、劉誥「逸少蘭亭六百年，別營樓閣奉金仙，琅函帝賜三朝筆，狔座僧談二祖禪，山怪有時渾露石，地靈無處不通泉，塵心未悟真如理，空熬晨鐘一篆煙。(四庫全書本、卷八、11葉表8)

<sup>55</sup> 『大寶積經』卷第三十五、菩薩藏會第十二之一、開化長者品第一「復次諸長者。眼非寂滅。耳鼻舌身意亦非寂滅。色非寂滅。…(中略)…爾時世尊。欲重宣此義。而說頌曰。取著生怖畏，由斯趣惡道，觀此有怖處，智者不應取，…(中略)…，勿如旃茶羅，下賤心來往，勿自持持戒，經(輕)毀犯戒者，持戒凌於人，是名真破戒，譬如鹿被羆，若縛若致死。」(大正藏第11冊、0201c7-0202a22)

<sup>56</sup> 『大方廣十輪經』(北涼失譯)相輪品第五「爾時佛告阿若橋陳如：我今聽汝清淨比丘受於第一床敷臥具飲食餽饋，能除一切眾生疾疫。何以故。若坐禪比丘闕少眾具，一切心數多起散亂。但念諸惡而不能得成就禪定，乃至到於阿鼻地獄受諸罪報。若眾緣備足修諸禪定，則易成就心得專一。若已得者皆令增長。一切不善覺觀散心，皆悉能知不令得起。趣向涅槃到於彼岸。若有坐禪未成就者，初中後夜當勤修習遠離憒鬧少欲知足於一切結使起於捨心。一切貪欲瞋恚憍慢貢高兩舌惡口妄語。如是等悉

毀禪

修禪憶千劫，不為諸佛護，若不隱正法，諸佛速護念<sup>57</sup>。

讚多聞

多聞增智惠，數問第一方，道逢羅刹鬼，背陰向太陽<sup>58</sup>。

毀多聞

譬如貧窮人，夜夜數他寶，自無半錢分，多聞亦如是<sup>59</sup>。

狼禪師偈

汝等雖坐禪，豺狼心不異，慣得常時便，悞你大大事。  
然（燃）燈光明照十放，智惠心眼無瑕穢，身體圓滿相具足，  
三世通達無有礙。  
燒真香，真香省財寶，不損一豪釐，方便供養最為好。

雜經偈 俗人受持

白諸佛，證生盲，欲遊去，恐損生，自防護，莫盪盲，悞煞者，  
淨土生。

雜經偈 行者受持

有足無足共行地，皆隨大小各相避，普共同行解脫門，速證無生人佛智。  
華嚴經偈 出家人受持  
前觀三尺地，當願護眾生，若有誤損者，願汝得生天。

雜經偈

諸佛應身遍法界，如來惠眼滿虛空，恒在佛心佛眼裏，  
眾生造罪幾千重。  
禪師齊三教論 大乘得性樂

得遠離。應受釋梵四天王等百千那由他供養恭敬。況復婆羅門刹利居士毘舍首陀所有供養。爾時世尊即說偈言：修禪滅諸結，餘業則不能，是故禪第一，智者應供養。」（大正藏第 13 册、0693c1-0693c16）

<sup>57</sup>『大方廣十輪經』卷第四「爾時天藏大梵說是呪已，白佛言：我願世尊。於此陀羅尼心生隨喜。…（中略）…爾時世尊，欲重宣此義而說偈言：顯現於我法，其福倍於彼，…（中略）…，修禪憶千劫，不為諸佛護，若不隱正法，諸佛速護念，若真善刹利，遠離十惡輪，能守護佛法，及持袈裟者，不謗毀正法，我所說三乘。」（大正藏第 13 册、0701b4-0701c28）

<sup>58</sup>『法苑珠林』卷第四十五、審學部第四「又智度論云，有人一切時見有異事。皆審問之。後時曠野行道逢羅刹執捉其人。其人見捉定死不惑。然見羅刹胸白背黑。怪問所由。羅刹答言。我一生已來不喜見日。所以常背日而行。故前白後黑。其人解意。急掣其手逐向日走。羅刹迴面向日不見其人。其人得脫。因說偈言：勤學第一道，勤問第一方，道逢羅刹難，背陰向太陽。」（大正藏第 53 册、0633b16-0633b24）

<sup>59</sup>『大方廣佛華嚴經』卷第五、菩薩明難品第六「爾時，文殊師利問法首菩薩言：佛子！如佛所說，聞受法者能斷煩惱，云何眾生等聞正法而不能斷。隨婬、怒、癡、隨慢、隨愛、隨忿、隨慳嫉、隨恨、隨諂曲，是諸垢法，悉不離心，心無所行，能斷結使？爾時，法首菩薩以偈答曰：佛子善諦聽，所問如實義，非但積多聞，能入如來法。…（中略）…譬如貧窮人，日夜數他寶，自無半錢分，多聞亦如是。」（大正藏第 9 册、0428c18-0429a4）

夫大地為牀坐，青天作殿堂，日月為燈燭，虛空作庫倉，  
諸天恒守護，沐浴是龍王，鬼神皆敬仰，四魔嚴道場，  
是事皆豐足，徒勞浪放忙，不求第一位，不得作公王，  
婆娑鄉曲里，遨遊遍四方，得性無過此，癡人徒自傷，  
了知空無我，身為淨土堂，但能悟此理，端坐是西方。

#### 小乘失性苦

廣造經作像，由如斷石光，見聞皆隨喜，空裏礼西方，  
至果生天上，三塗橫受殃，學他名相善，行業不相當，  
示作者得脫，實作者受殃，更欲求難解，各各自思量，  
吾今破相說，法界作道場，賴兒普寺住，別寺善思量，  
赤心相向道，於理實無妨，不須相怨恨，身證果滅亡。

#### 中乘<sup>60</sup>不異經

夫大乘小乘，元來不別，人心有異，執見不移，起教之人，  
方便引誘，學行之者，依文定義。止為見解不同，於中起謾，  
還同逆子，嫌父無慈，佛是大人，善能含忍，**伶俦辛苦**，  
**五十有餘**<sup>61</sup>，兒忽自來，甚釋吾意，父子相見，還是一家，  
和合共同，元來不別，依託強緣，心裏惺悟，解好道理，  
生處得度，饒益有情，自然餽餽，不須貯積，法界倉庫，  
普親阿孃，阿耶守護，永息怨結，三佛常住，眾生界盡，  
發頭更作，

<sup>60</sup>『法門名義集』賢聖品法門名義第五「二種辟支佛。一者出無佛世。獨悟非常思惟得道。名為緣覺辟支。二者值佛為說十二因緣之法。觀因緣之理而得悟道。名為聲聞辟支。於三乘中。此為中乘。亦得有餘無餘二種涅槃。辟支佛者此云緣覺。辟支者此言緣。佛者此言覺。」（大正藏第 54 冊、0201a27-201b3）

<sup>61</sup>『妙法蓮華經』卷第二信解品第四「世尊，爾時長者有疾，自知將死不久。語窮子言：我今多有金銀珍寶，倉庫盈溢，其中多少，所應取與，汝悉知之。我心如是，當體此意。所以者何？今我與汝，便為不異，宜加用心，無令漏失。爾時窮子，即受教勅，領知眾物，金銀珍寶及諸庫藏，而無怖取一滄之意。然其所止故在本處，下劣之心亦未能捨。復經少時，父知子意漸已通泰，成就大志，自鄙先心。臨欲終時，而命其子并會親族、國王、大臣、刹利、居士，皆悉已集，即自宣言：諸君當知！此是我子，我之所生。於某城中，捨吾逃走，**伶俦辛苦五十餘年**，其本字某。我名某甲，昔在本城懷憂推覓，忽於此間遇會得之。此實我子，我實其父。今我所有一切財物，皆是子有，先所出內，是子所知。」（大正藏第 9 冊、0017a29-0017b15）